

短歌（二十三）

下田 明美

何処からも拝観できた聖堂が

焼けてしまった、献金の人波

鬱そうと葉ばかり茂る梅の木に

たった二〇個、実がなっている

薄らと埃がたまるリビングに

人待ち顔の燈あかりが四つ

紙一重、という空間がお気に入り

雨樋に寄り添う紫つゆ草

えいやあと放り出してしまいたい

放り出せないこともあるのだ

山際の空は深く冴えわたり

秋が来ている樹々のざわめき

クーラーを入れても暑いリビングに

浸かっているだけ腰痛ありて

知らぬ間にナツズイセンが咲いていた

移住先は宇佐美で良いの？

鳥たちは私のことが分かるのか

雨戸開ければ振り返りて鳴く

青竹の中を流れるソーメンを

箸でつかむ子眺めている子

紫陽花の花芽は黄緑未だ堅い

雨雨ふれふれ大房の花

整形でウオーターベッドに横になり

受ける治療は指圧の心

